

主題:高齢者のソーシャル・キャピタル研究の国際動向に関する研究**一副題: 計量書誌学によるネットワーク分析を用いて**

○ 早稲田大学 氏名 海老澤圭視 (009492)

キーワード3つ: 高齢者, 社会関係資本, ネットワーク分析

1. 研究目的

我が国における独居高齢者数は今後も増加の一途を辿ることが予想される。『令和5年版高齢社会白書』によると、独居高齢者は、1980年には65歳以上人口の11.2%であったものの、2000年には17.9%、2020年には22.1%に増加し、2040年には24.5%に上るとの推計がなされている。高齢者が一人暮らしであることには、様々な課題が指摘されている。山下ら(1992)による調査では、独居高齢者ではやや抑うつ傾向にあり、人生の満足度も低いことが示されている。また、磯谷ら(2011)によると、居住形態が抑うつ傾向に最も強く独立して関連し、独居群は家族同居群よりも抑うつ傾向が高く治療意欲の低下を支持する回答が多いとの報告がなされている。さらに、斎藤ら(2013)の調査では、性別や年齢、治療疾患の有無などにかかわらず、孤立高齢者は要介護状態への移行リスクが高く、男性高齢者の間では満足孤立でも要介護リスクが高いことが示されている。独居や孤立している状態により社会関係資本、つまりソーシャル・キャピタル(以下、「SC」)が希薄な状態となり、抑うつ傾向や治療意欲に影響し、要介護状態へのリスクが高まることが予想される。我が国における独居高齢者の将来的な増大を踏まえ、国際的で多角的な視点から国内の関連研究の流れを一層加速させることが求められる。そこで本研究では、関連領域の国際的な研究動向を明らかにすることを目的に、定量的に文献調査を実施する。国際的な研究動向を体系的に把握することにより、高齢者に関するSC研究の参考資料となることが期待される。

2. 研究の視点および方法

本研究では、計量書誌学における科学知識マッピング(science knowledge mapping)に基づいたネットワーク分析により、高齢分野におけるソーシャルキャピタル研究の国際的な動向を明らかにする。科学知識マッピングとは、知識領域(knowledge domain)を対象として、対象領域における科学知識の発展や構造を示すものである。これは、図式による可視化と系譜によるネットワーク化の二つの性質を持っている。視覚的な知識図であると同時に、知識単体ないし集合体間のネットワーク、構造、相互作用、交差、発展または派生などを示す、直列化された知識系統図である。その応用であるネットワーク分析では、対象文献の書誌情報を用い、同一文献内で、同時に出現した頻度や引用された頻度などに

基づき分析を行う。

3. 倫理的配慮

本研究では、調査時点で既に公表されている文献の書誌情報を用いて統計分析を実施した。そのため、人を対象とした倫理審査は不要であると考えた。また、一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理規程ならびに日本社会福祉学会研究倫理規程にもとづく研究ガイドラインを遵守して実施した。本報告に関連して開示すべき COI 関係にある企業等はない。

4. 研究結果

本研究では、高齢分野における SC の国際的な研究動向を体系的に明らかにすることを目的に、関連領域の論文 714 編を対象に計量書誌学によるネットワーク分析を実施した。特に、参考文献の書誌情報を用いた共引用ネットワーク分析では、分析対象の著者が引用した参考文献の変化に着目し観察することで、研究パラダイムの発展動向を計量的・客観的に評価し、関連領域の変遷を把握することができる。分析の結果、19 のクラスターが抽出された。中でも #0 のマルチレベル分析、#1 のウェルビーイング、#2 の認知的 SC の 3 つのクラスターにより関連領域の研究が形成されてきたと言える。クラスター別に発展動向を見ると、#2 の認知的 SC 研究は、1990 年代前半まで主流であったが、90 年代後半になりマルチレベル分析やウェルビーイング、#4 の幸せや #5 の孤独に関する研究が活発となり、特に孤独に関する研究が注目を集めていることが分かった。

5. 考察

近年では、#4 の幸福と #5 孤独に関する研究が活発となっている。幸福に関する研究は社会的・地域的繋がりや死亡率との関連を検討した Berkman, L.F.(1979)の研究にはじまり、Putnam, R.(1995)の研究により発展し近年まで続いている。一方、孤独に関する研究は、Radloff, L.S.(1977)の抑うつ尺度の研究から Berkman, L.F.ら(2000)による社会統合 (social integration)に関する研究へとつながり、21 世紀に入り一層活発さが増している。分析結果から、マルチレベル分析やウェルビーイング、認知的 SC、幸福に関する先行研究を踏まえ、孤独を中心とした研究パラダイムが発展することが示唆された。